

優しさの先生

赤松

青海

人物

川端この葉（15）中学3年生

小沢彰仁（15）この葉の同級生

磯村優人（15）故人・この葉の友人

栗山夏帆（15）この葉の母

磯村妙子（46）優人の友人

清水浩（41）教師

高校生

教頭（50代）

校長（60代）

○葬儀場・式場内

祭壇に磯村優人（15）の遺影。

磯村妙子（46）、祭壇の優人を見て、ハンカチで零れる涙を拭う。

制服姿の川端この葉（15）、安芸静希（15）、下座で妙子を見つめ、栗山夏帆（15）、静希の隣で転た寝。最後方には大きなカメラで場内を撮影するメディアスタッフ。

妙子「ごめんね、何も、出来なくて」

後方からシャツタリーを切る音。この葉、膝の鞄をぎゅっと握る。

妙子「ママ、優人のために頑張る。法廷で」

妙子、強気な語調で言うが、優人の遺影を見て再び泣き出す。

パシヤパシヤとカメラ音がうるさい。

夏帆、小声で静希に囁く。

夏帆「静希さあ、カメラウザくね」

静希「仕方ないよ。：：自殺だし」

夏帆「自殺つてそんなにヤバい？」

この葉 「夏帆」

夏帆 「…ごめん生徒会長」

参列者が列を作り、焼香していく。

夏帆、沈黙に耐えきれず、人差し指を

トントンしながら、小声で、

夏帆 「ウチも死にてゝつてなる時ある。テス
ト返された時とか三者面談の日とか」

静希 「…あと偏頭痛ひどい日ね」

夏帆 「それ。あと生理おもー」

この葉 「夏帆、もうすぐ私たちの番。静希も」

この葉が立ち上がった瞬間、フラツシ
ュ音が後方から大量に聞こえる。

小沢彰仁（15）、清水浩（41）を
伴つて式場に入つてくる。

妙子、小沢を見て勢いよく立つ。

妙子 「何しに来た！人殺し！」

清水 「すみません。ご気分を害されたのは分
かりますが、彼も焼香をしたいと」

小沢、ずんずん進み焼香に手をとる。

妙子、焼香箱を払い、焼香が散乱。

妙子「アンタにさせるわけないでしょ！」

小沢「…優人は自殺っす」

妙子、小沢を押し出して場外に出す。

妙子「返して！優人を、返してよお…！」

この葉「お、落ち着いてください！」

この葉、妙子にかけより、肩に手を置くが振り払われる。

妙子「邪魔するなら帰れ！傍観者！」

カメラが騒々しくシャッターを切る。

この葉の鞄からノートがのぞく。

○ 槻木中学校・職員室

新聞紙に「槻木中学自殺事件、過去のいじめ加害者に遺族怒り」の見出し。教員が真剣な面持ちで勢揃いする。

清水、校長（60代）、教頭（50代）に事件の所見書を渡す。

校長「清水先生、ありがとうございます。すみませんが、清水先生から本件の概要を説明していただけますか？」

清水「私も把握している限りですが。磯村優人君の自殺について、始まりは1年の時の部活内イジメだそうです」

教頭「磯村は…バスケット部だったか」

清水「小沢彰仁君を中心とした三人が、バスケの上手くなかった磯村君をいじつたことが始まりです」

教頭「からかいの内容は?」

清水「プレイミスでヤジを飛ばすとか、仲間はずれにするとかです。ほら、バスケットて一人じやゲームできないので」

教頭「問題は小沢と磯村が同じクラスということだろう。イジメが教室にも及んだ」

校長「なぜ、何も出来なかつたんですか?」

全ての教員が俯く。

校長「イジメは初期対応が大事なんですよ。

悪ふざけだと思つたでは済まない。なぜ早期対応できなかつたんですか?」

清水「…当時のバスケット部顧問は新人でその後休職。当時の担任は転職しました」

校長、嘆息し、椅子に深く腰掛ける。

清水「話を戻します。磯村君は一年の秋以降不登校になりました。保健室登校を続けてなんとか卒業単位を取っていましたが」

清水、新聞紙を高く掲げる。

清水「三年になり進路選択を迫られ、それがストレスとなり自殺したと考えています」

新聞紙の見出し記事を叩く。

清水「私は、この記事にあるような小沢君と磯村君の自殺の直接的因果関係は無いと考えます。葬式には私が連れてきました」

校長「私にも相談して欲しかったよ」

清水「それは…すみませんでした」

校長、呆然と天井を見る。

校長「…あと数年で定年だったのに」

記事には「被害者遺族は少年A、校長、区教育委員会に損害賠償請求訴訟を起こすつもりである」とある。

古いビルの中にある小さなゲーセン。

○ゲームセンター・店内（夜）

小沢、対面の高校生と対戦ゲーム。
画面のキャラを巧みに操作し、勝利。

小沢、退屈そうに溜息する。

高校生「あ？何？」

対戦した高校生が小沢に詰め寄る。

小沢「別に、なんすか？」

高校生、「小沢彰仁」の名札を見て、

高校生「あ！お前人殺し中学生だろ！」

小沢、高校生を睨む。

高校生「どう？人殺した気分。さぞ爽快！」

小沢、高校生の横顔を殴る。

高校生「てめエぶつ殺す！」

高校生が小沢につかみかかり、喧嘩。

○ファーストフード店・テーブル席

この葉・静希・夏帆、テーブル席でボーテトを摘まんで勉強している。

夏帆、ポテトにソースをつけ食べる。

夏帆「結局ウチらも追い出されちゃつたのマジ腹立つ。ウチら受験生だよ？ 態々来てやつたのに。磯村と話したこともない」

静希「私とこの葉ちゃんは、一年の頃同じクラスだつたけど。ね？」

この葉「…そうだね」

この葉、鞄を抱きしめる。

静希「この葉ちゃん、大丈夫？」

この葉「…え？ うん、大丈夫」

この葉、ポテトに手を伸ばすが、空。

夏帆「あ、ごめん！ ウチばつか食べてた！」

この葉「いいよ。ちよつと買つてくる。ポイントたまつてるし、いまポテト安いから」

夏帆「えマジで？ ありがと！ さす会長！」
この葉と一緒に静希も立つ。

静希「私も行く。クーポンあるから」

○ 同・レジ前

この葉・静希、レジ前で待つ。

静希「磯村君のこと、ショックだった？」

この葉「…何で？」

静希「ずっと緊張してる感じだから」

この葉「…これ、磯村に渡せなくって」

この葉、静希に鞄の中身を見せる。

静希「…優しいね。さすが生徒会長」

静希、順番が来てカウンターに行く。

静希「あ、来た！行こ！」

この葉、小声で呟く。

この葉「…優しくなんてないよ」

○ 道路・交差点（夜）

この葉、交差点の先の静希・夏帆に手を振り、帰途につく。

帰る先を見ると、ゲーセンの前のゴミ捨て場に人の脚が見える。

駆け寄ると小沢が伸されている。

この葉「小沢？」

小沢「…川端じやん。大丈夫、かすり傷」

この葉「別に格好よくない。ほら立つ」

小沢、頭を搔いて立ち上がる。

○公園（夜）

この葉、小沢とブランコに並んで座る

小沢の顔に、花柄の絆創膏。

この葉「……うん、可愛い」

小沢「……うつぜ」

小沢、苦笑の後、この葉と笑い合う。

この葉「……お葬式、来たの意外だった」

小沢「そら行くわ。俺が殺したも同前だし」

この葉「だつたら傍観者の私は殺人ほうじよ幇助だ」

小沢「……違えよ。お前いい奴だろ」

この葉「……皆、勘違いしてる」

この葉、徐に鞄から「交換ノート K.K

and Y.I」と書かれたノートを出す。

この葉「中一の頃、女子の間で交換日記が流行ったの。私もやつてた。磯村と」

小沢「えつ？！お前ら、……マジ？」

この葉「教員つて、ぼつちの子がいると、友達役を立てるの。私にそのお役目が来て」

小沢「……んだよつまんね」

小沢、退屈そうにブランコを揺らす。
この葉「あの頃、学級長になるのが夢でポイント稼いでた。頑張って仲良くしてたの。
でもそんな魂胆、磯村にはすぐバレた」
ノートに「無理して仲良くしなくていい。おせつかいK.K」とある。

小沢「うわキモ。あいつそういう所あつた」
この葉「磯村が正しかったよ。目隠し举手で学級長は静希が選ばれた。薄目開けて見たら、私に票入れたの、磯村だけだつた」

小沢、ノートを捲るこの葉を見る。

この葉「私、元々優しくない。磯村が教えてくれたの。……私みたいなやな奴にも、手を差し出せるのが、……本当の優しさ」

この葉の涙がノートをぬらす。

小沢「……最後、焼香くらいしたかったな」
この葉「……うん」

ノートの一番新しい頁に「票入れてくれて、ありがとねK.K」という伝言。

赤
松

青
海